

春燈

11月号

November 2011



主宰の句

安立公彦

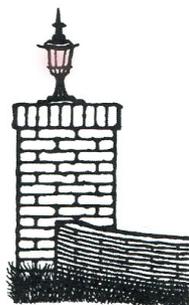
夜半覚めて聞く雨音も文月なる

いつ消えし秋の片虹迢空忌

旅人に帰燕の空の高かりし

邯鄲よ母の黄泉路に沿うて鳴け
(義母逝く二句)

秋蝶一つ葬家の庭を去りやらず



久保田万太郎の句

度外れの遅参のマスクはづしけり

『流寓抄』昭和三十三年

あちこち動きながら、また人と話しながらでも、ぼんぼん句が浮んできたという。この句もそうである。

三時間近くも遅れて来て「いやどうも、横須賀線が遅れてね」と大きなマスクを外しながら即座にこの句が出来た。照れ臭さもあつたであろうが、この「度外れ」は絶妙で総てを語っている。「はづしけり」と結んだところなどは「赦されよ」の声が聞こえてきそうだ。

三上程子

久保田万太郎の句

夏瘦やひくめにしめし帯のまた

『流寓抄』昭和二十一年

結語の二字、「また」に鍵がある。

万太郎の俳句は、言葉に含む味や余韻の扱いが、読者を言い知れぬ世界へと引き込むおもむきがある。

「また」には興味や関心の驚きが見え、念押しの効果も伺えて一句の強さとしている。どうも結語の後に万太郎独特の……の世界があるようだ。この景を見過ごすことの出来ない作者の熱い情。どう見ても、いい女の……。

中野さき江

燈下集



○ 小泉三枝

観音の千手の一指蜘蛛の糸

いつからを余生といふや蟬時雨

夜の秋やかすかに音す砂時計

窯跡の陶片捨場赤のまま

秋蟬や喉にはりつくオブラート

○ 宮崎裕子

夏休くつろいでゐる椅子・机

スニーカー一足つぶし夏果つる

持ち歩く水ありがたき原爆忌

船陸に上りしままや秋の風

孟蘭盆会帰る家なきみ霊かな

○ 平野加代子

夫好みの反り身なりけり茄子の馬

想定外のひとりとなれり盆の月

文月や文箱の底の奥許

父祖の地の説とび来る芋嵐

スケッチブックに秋日をどつてゐたりけり

○ 諸岡孝子

新涼や祥瑞徳利捻文

鎮魂の海へと流れ揚花火

足るを知る寧けさにあり月見豆

藻に鳴く虫喪心なほも濃かりけり

街はみな潮錆のいろ秋尽くる

○ 田嶋 洋子

父祖の地に女系三代踊りけり

秋暑し両手で招く招き猫

父恋ひの帆船発つや秋の声

曲折の心変りや酔芙蓉

月明り尾ひれつげずに告げにけり

○ 菅 澤 陽 子

母の名の書かれある柄や白日傘

渚までかけつこをする跣足かな

巻き鮎のはなやぎ並べもてなざる

驟雨去り暮るる早さや夜の秋

思ひきり歌ふ童謡大夏野

○ 石 橋 公 代

うちそよぐ草合歡の花夕爾の忌

普段着を少し派手目に鳳仙花

草紅葉石仏膝に銭溜めて

秋夕焼鎌を研げよと塞の神

いしぶみの声なき声や十三夜

○ 白 神 知 恵 子

喜雨を得し女竹の叢のさんざめく

秋立つや庭師の拭ふ石の顔

新涼やシエフの画添へておしながき

校長の楷書のやうな踊かな

かまきりの構へに猫の怯みけり

○ 長 谷 川 歌 子

昇るしか他なし灼くる歩道橋

駆くる子の都電に挑む雲の峰

夏草や大型店のなぐり込み

兄来れば妹の顔西瓜食ぶ

焙烙と気長に遊ぶ落花生

○ 佐 々 木 良 玄

卓袱台に鉛筆の跡夏休み

飯籠る鼻柱強き寺小僧

米櫃の虫怒鳴りつけ夏果つる

縄文の遺跡乾ふる晩夏光

秋風や村の鎮守の空祠

当月集

安立 公彦選



○ 矢口 笑子

一水の調べ豊かに今朝の秋

芯硬きシャープペンシル涼新た

光年の長距離恋愛星今宵

星あまたふやして果つる盆踊

冷感タオル頸におもたき秋暑かな

○ 藤原 若菜

夜の秋やクロスワードに励む母

赴任地に夫着くころか草雲雀

踊る子のはや流し目をおぼえけり

両端の尖る檸檬や少年期

北総や厄日間近の通り雲

○ 齋藤 晴夫

老鶯や浮雲うごき影をおく

緊々と草の念力原爆忌

暦日の馳けてゆくなり日雷

新涼や天目茶碗に潤む星

落葉松に透く幻日や夏の果

○ 高村 和子

立秋の木洩日流す梓川

母と子の旅に星降る信濃かな

父祖の地や里山覆ふ薄紅葉

車椅子の父の軽しや大花野

幼子の提灯ゆるる展墓かな

○ 中村 紀美子

草雲雀夜明の空のしづもれり

傷痕の少し黒ずむ残暑かな

久方の雨や木槿の息づかひ

干し豆の筵に乾く終戦日

秋簾日の斑をゆらす母の部屋

春燈の句

安立 公彦選



面影のいまだ新し門火焚く

宮城 西川 春子

全壊の家屋を守るや花芙蓉

露天湯の湯気ほのぼのと星月夜
信濃路や棚田に揃ふ稲の花

蛸やわれに就きくる今朝の風

浜木綿の咲くや岬の十字の碑

芋の葉の思ひそれぞれ露明り

新涼や白き脚絆の托鉢僧
黒猫の青目さゆるや晩夏光

子規庵の一片の鶉見て帰る

千葉 吉村さよ子

艶髪のなごりのうなじ秋扇

風吹くや千の風鈴千の音

八月や火照りの余る川あかり

ねぎらひつ秋の簾を納めけり

慰めにつまべに弾く人づかれ

戸をたたく二百十日の風の音

秋ざくら風の流れとともにあり

東京 横山さくら

秋の田を見下ろす家の小窓かな

朝霧や霊峰たかく海に浮く
あきつ舞ふいろなき水の音かろし

盆踊揃ひの帯の姉妹かな

神奈川 石田 康明

秋蝶に見透かされたる心かな

終戦忌片道切符無き果報

流灯の澱みつ流れ遠ざかる

東京 池田 節

桐一葉落つる夜明の静寂かな

稲びかり関東平野し吹かせて
永らへて八日目を鳴く秋の蝉

余言

安立公彦

片陰をはみ出してゐるポストかな

橘 正義

「片陰」は、夏の季語の中でも、最も夏らしい情趣を持つ季語の一つである。

人通りも無い一本道の、とある店舗の前に立つポスト。日が高くなるにつれて店舗が作る片陰も失せ、そのポストは灼けつくような日差しに照らされている。

景を述べるとこのような散文になる。しかし、「はみ出してゐる」が、ここに述べた内容をわずか七文字でみごと表現する。何とはなしの滑稽感を伴いながら。

病む人の団扇を胸に眠りけり

萩原 すみ

作者は余り身辺を詠むことをしないが、以前「夫の墓」の句を出していたことがあるので、この句は回想句か。しかし

そういう背景にことさら深入りするのは、俳句鑑賞の本道を逸れる。

「病む人」を見舞う作者。その人は作者が訪れたことも知らず寝入っている。その胸にはその人が今まで使っていたであろう一本の団扇が、置かれたままになっている。病人にとつて眠りは大切な回復への道である。作者は黙つてその人を見て詰めている。私小説の一節を読むような句だ。

機嫌よき阿蘇の五岳や鳥渡る

尾野奈津子

九州には世人によく知られた山が幾つかある。天孫降臨の神話を頂く霧島山、維新の志士の心を支えた桜島山、先の大戦中、特攻機が知覧の基地を離れ本土を去るときに、離別の翼を振つたという開聞岳、そして広大な裾野を持つ阿蘇山。「阿蘇の五岳」は、根子岳、高岳、中岳、烏帽子岳、杵島岳の五岳を指す。

熊本に降り立ち市内に入ると、遠く東方に阿蘇の外輪山が望まれる。時は渡り鳥のシーズン。晴れ上がった阿蘇と渡り鳥の取合せは絶妙だ。「機嫌よき」は当地への挨拶。

実石榴やひとりづつ人遠くなる

江草 礼

家を建てるとき庭隅に一本の石榴を植えた。「万緑叢中紅一点」の謂れに做つたのだが、この石榴なかなか花をつけて

くれない。従って実石榴もめったに出来ない。それだけにたまに実った石榴は良く洗って机上に飾る。

作者はいま、秋の日に色づく石榴を仰ぎながら、身辺の人の死を思うのだった。仲夏、鮮やかな真紅の色を見せるその花と異なり、実石榴には何かしらの重さが、見る人の心に負担のような思いをかける。「ひとりづつ」に作者の気持がよく表現されている。

古り古りて君の香もなし秋扇

岡野イネ子

この「君」は夫君か。「古り古りて」に作者の思いが出ている。思い出の残る扇だろう。「君の香もなし」は「古り古りて」の思いを確かに実証する。「秋扇」の季語が効果的だ。歳時記によると、扇は日本で作られ、『万葉集』の頃から使われていたとある。団扇は中国から伝わったもの。普通に考えると逆のように思われるのが史実の妙か。

精霊舟父母の昭和を流しけり

久保 久子

「精霊」は死者の靈魂。「せいれい」とも。この言葉には、人や動物のみでなく、草木やまた無生物などを含む個々に宿る、超自然的な存在の意味もあると言ふ。

そういうことを考えると、私たちの祖先が、盂蘭盆会の行事の中で、この「精霊舟」を如何に大切にされたかということが良く理解される。但し現代は、そういう伝統行事をも、観

光の名に統一されている地域が多くなって来たという。しかしそれでもいい。行事が残るといふことは、その形の中に真実が残るといふことだから。

作者はいま、精霊舟を流しながら、「父母の昭和」ということを思う。時代の中で昭和ほど大きな起伏を持つ時代はなかった。「父母の昭和」の中には、その昭和を真摯に生きて来た父母への、感謝と慰労の思いがよく出ている。

芯硬きシャープペンシル涼新た

矢口 笑子

「シャープペンシル」という無機化合物をストレートに詠むことは、これ迄余り見かけなかった。しかしこの句は抒情という詩歌のよりどころが、私たちがこれまで馴れ親しんで来た対象以外にもあり得ることを示唆するのだ。俳句の対象を固定しないという姿勢には共感を覚える。

踊る子のはや流し目をおぼえけり

藤原 若菜

牧歌、風俗、滑稽、それらを向上という器で攪拌して、とろりと流し込んだような句だ。中七下五の表現が、「踊る子」をしつかりと把握している。踊る子の句がまた一つ枠を広げた。同時発表の、〈赴任地に夫着くころ草雲雀〉の句も良く出来ている。こちらは正統的な相聞句。この作者も表現が小さく固まっていなところがいい。(以下略)